

精神科救急のやりがいとは
患者さんとの関わりの濃密さですね。



患者さんに寄り添う姿勢を貫く

Q おうばく病院では、「身体拘束」の最小化を目指すなど、患者さんの人権を重視する取り組みにも熱心に取り組んでおられるそうですね。

大月 ええ。精神科では患者さんの精神状態の悪化に応じて、隔離や身体拘束が行われることがあります。とくに身体拘束となると、患者さんの人権を著しく制限するわけですから、やらないに越したことはありません。私どもとしても、なるべくやりたくないのです。ただ、とくに救急には興奮状態の患者さんも多いですし、拘束しないと患者さんの安全が確保できない場面も多くて、ゼロにすることは難しい。

黒木 それでも、私たち看護師が主導して身体拘束最小化を目指す取り組みを続けて、少し前に全病棟で拘束ゼロを達成した日があったんです。それも一日ではなく、数日にわたって……。当院くらい大規模な精神科病院としては、かなりすごいことやと思います。チーム医療で頑張った結果です。

Q そのことも家系的ですが、おうばく病院は精神科救急においても、患者さんに寄り添う姿勢が顕著に感じられます。たとえば、その姿勢があらわれた仕組みとして、「ホッと入院」や「急性期ファミリーグループ」というものがあるそうですね。

大月 はい。二つとも、精神科救急のプログラムの一つとして、一〇年くらい前からずっと続けてきたものです。 「ホッと入院」は精神科救急で入院してきた患者さん向けのもので、五週間でクールとして、ご自分の病気について学んでもらおうというものです。一週目は医師、二週目は薬剤師とか、週ごとに講師役が変わって、マンツーマンでいろんなことを学んでもらいます。たとえば薬剤師からは、服用している薬がどのようなものなのかを詳しくレクチャーします。

田之口 最後の週には、退院後の生活全般について、どういう福祉制度が利用できるのかなどということをも、詳しくレクチャーします。

大月 精神科救急に入院中に、自分の病気について学ぶ機会というのは、じつはあまりないものです。ネットで検索しても正しい情報が得られるとは限りませんしね。そこで、当院として正しい情報を提供し、病気を「自分ごと」して捉えてもらうと同時に、安心してもらうこと

が目的です。だからこそ「ホッと入院」なんです。

Q 「急性期ファミリーグループ」は、その名のとおり患者さんのご家族向けですね？

大月 ええ。月一回で二回ワンセットの家族向けの勉強会です。統合失調症で救急入院された患者さんのご家族に声をかけて参加してもらっています。病気や薬や支援制度について、それにご家族としてどう対応すればよいかといったことを学んでもらいます。単なる勉強会というより、本音で語れる場としての意味合いも強いですね。語る中でこれまでの大変さなどを吐露されるご家族も多くて、それも大切なことだと考えています。コロナ禍以降はZOOMを使ったオンライン開催になっていますが、ずっと続けています。オンラインだから、遠



ご家族の支えが
患者さんの退院後の
生活に良い影響を与えます。